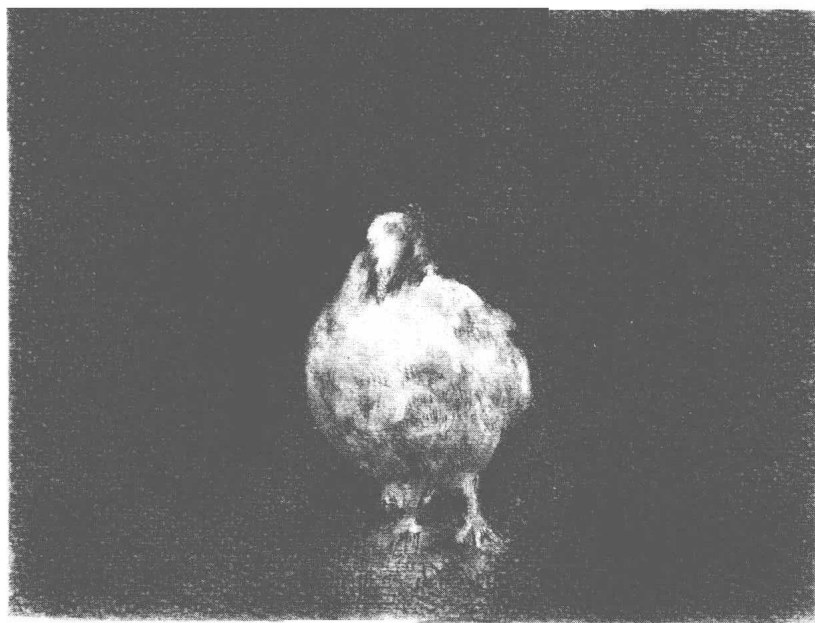




雲の宴 [下]

辻 邦生





雲の宴 [下]

辻 邦生

雲の宴うたげ(下)

一九八七年三月二十日 第一刷発行

著 者 辻 邦生

発行者 八尋舜右

印刷所 共同印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地五ノ三ノ二
電話・〇三―五四五―〇一三一(代表)
編集・図書編集室 販売・出版販売部
振替 東京〇―一七三〇

定価 一三〇〇円

歌え、私の心よ、お前の時の燃えているあいだ、
お前のしばしの時を歌え。

——ヘルマン・ヘッセ——

雲の宴 (下) 目次

第十一章 聖域 7

第十二章 氷雨 55

第十三章 鐵路 99

第十四章 風紋 141

第十五章 月蝕

183

第十六章 叛乱

227

第十七章 乱雲

267

第十八章 鬼火

313

第十九章 潮路

357

終章 曙光

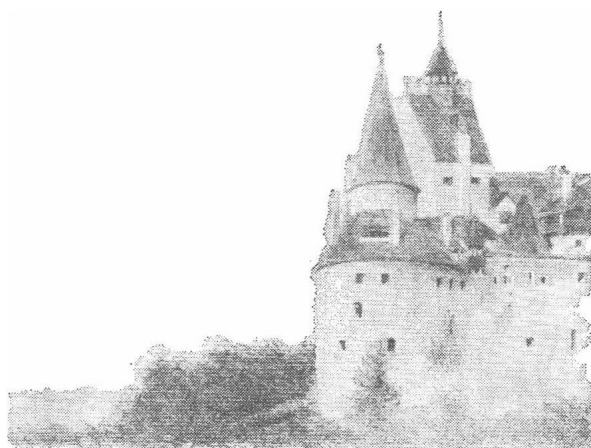
401

装釘 中島かほる
装画 福本章

雲
の
宴^{うたげ}

(下)

第十一章 聖域



F. 11. 11. 11

船が、不意に、底ごもった汽笛を鳴らした。汽笛は、二度、三度と鳴り、やがてその反響が、こだまとなって、戻ってきた。

郡司薫は腕時計を見た。午後三時をすこし過ぎていた。甲板に出ると、鮮かな緑に覆われた山々が、もう目の前に迫っていた。

「サンタ・クルスですか？」

郡司は、船長クリステンセンに聞いた。赤毛の船長は制帽をかぶり、操縦室の窓から、港のほうを注意深く眺めていた。

「さよう。サンタ・クルス・デ・テネリフェです」

緑の山々が港をかこみ、港に沿って、赤褐色の屋根、白壁の家が、ぎっしりと並ぶ。港には、大小の漁船が錨を下していた。

郡司は、その時、港の漁船の中に、日の丸がひるがえっているのを見て、はっとした。

「日本の漁船もありますな」

クリステンセンも、目ざとくそれを見て言った。

「カナリア諸島を拠点にする日本漁船でしょう。北大西洋で操業しているのです」

「大西洋？ そりゃ、まだどうして？」

「マグロを獲るためです」

「マグロ？ マグロを日本人は好むのですか？」

「寿司には、なくてはならぬものです」

クリステンセンは口笛を短く吹いて、驚きを現わした。

しかし郡司は、なるべくなら、日本人乗組員と顔を合わしたくない、と思った。別に、隠れて悪いことをしているわけではないが、同国人に遇うのが、いまのような状況では、少々わずらわしい感じだった。

——とにかくカッサンバラの甥に会ったら、早々に、船の中に引っこむことだ。郡司は、そんなことを考えながら、二日前に受けとった指令を思い出して、

デンマーク船がその電信を受けとったのは、ジブラルタル海峡を越え、モロッコ沖を通過している時であった。

カナリア諸島の首都サンタ・クルスに寄港して、ルーマニアで積みこんだ農業加工物（主としてジャムと果汁類）をおろすことは、コンスタンツァですでに決っていたが、電文はさらに、もう一つ別の任務を、郡司に伝えてきたのだった。

それは、サンタ・クルスで、カッサンバラの甥デンバ・カマラに会い、今後の指示を仰ぐように、という内容であった。ガボンのマウンバ港は、名目の目的地だったから、初めから変更することは予定されていたが、本当の目的地象牙海岸の小港サッサンドラも変更になるらしい。これはどういふことだろう——郡司は、港の通りに並ぶ倉庫やビルを見ながら、そう思った。

サンタ・クルスの波止場は、白人の観光客や、浅黒いモロッコ人の土産物売りで賑わっていた。バケツに入った魚を道端で売るやせた黒人の女もいた。

旧市街の市場は、ほとんどが黒人で、バナナやオレンジが幾山にも盛り上り、そのそばに、土のついた山芋、ねぎ、かぶ、穀物などが目白押しに並んでいた。魚も豊富だった。

サンタ・クルスの市街は、すぐ背後に、濃い緑の山が迫っていた。港を離れると、細い格子窓のある植民地スタイルの建物や、スペイン風の中庭のある家が、アカシアや棕櫚や椰子の濃い葉群に覆われて、建っていた。

郡司薫は、カッサンバラの甥デンバ・カマラが港で待っているものと思っていた。しかし舢舨で波止場まできて、しばらく待っていたが、誰も、郡司に声をかけるような男は、現われなかった。

ドゥムビア大尉は、どうしてデンバ・カマラと会う場所を指定しなかったのだろう。電信を傍受されるといふ危険があったのだろうか。

それとも、郡司が日本人なので、デンバ・カマラのほうから、容易に話しかけられる、と思ったのだろうか。だが、サンタ・クルスには、日本人は何人もいるのだ。郡司は、狭い街をひと廻りして、市場も、学校も、教会も見えて、また港に出るまで、十人以上の日本人とすれ違った。もしデンバ・カマラが、日本人という特徴だけで、郡司を捜すとしたら、なかなか見つからないのではないだろうか。

郡司は、もう一度、波止場に立つと、自分の名前を書いて、胸にぶら下げたい気がした。

—— あせったって仕方がない。クリステンセンは、船荷の陸揚げと燃料補給で、明日いっぱいかかる、と言っている。それに、船は、デンマーク国旗を掲げている。捜す気になれば、むこうは、いつでも、捜せるはずだ。

すでにアフリカ圏に入っているのに、カナリア諸島の気温は二十度をわずかに超える程度で、海からの風も気持よかった。遠く、島の中央に聳える火山性の山脈に雲がかかっていた。

「日本のかたですな」

郡司の背後から、誰かが、日本語で声をかけた。郡司は、とっさに、振りむき、相手の言葉が分らないような様子をした。

「何と言ったんです？」

郡司は、中国人を装って、フランス語で言った。相手は、人のいい、ひげ面の、機関長のような感じの男だった。

「なんだ、日本人じゃないのか」男はひとりごとのように言って、「ソーリー、ソーリー」と手を振って離れていった。

それと入れ替りに、背の高い黒人が、ぬっと近づいてきた。

「君の籠には金色の鳥が入っているかね？」

黒人は、沖の船を見るような様子で、郡司のそばで、足をとめると、低い声で、そう言った。

「ぼくは郡司だ。君はデンバ・カマラだね？」

郡司は相手をちらつと見た。

「舢で、君の船にいけるかね？」

デンバ・カマラは、波止場にしゃがみ、海の中の魚を見ているような様子をして言った。

郡司は、客を待っている舢のほうに手をあげた。舢はすぐ近づいてきた。二人は、それに乗って、港のまん中に停っているデンマーク船までいった。

船では、クレーンが船倉の鉄の覆いを持ちあげているところだった。翌日の荷揚げの準備作業が行われていた。

「ぼくがデンバだ。よろしく」

黒人は、上甲板に出ると、はじめて白い歯を出して笑い、郡司に握手を求めた。笑うと、温か

い、柔和な表情になった。

「電信を受けとって、驚いたと思うが、どうも、フランスの情報機関が動き出しているらしい。ドウムビアは、このままでは、危険だと判断したのだ」

「どうしてフランスの情報機関が動き出したんだ？」

郡司は、表情を固くして聞いた。

「例の大使館員の事件さ、君が関係した」

「ミッテランが当選した夜の事件だね？」

「そうだ。そのため、情報機関は、幾つかの状況を想定して、捜査している。ほとんど、あてずっぽうだが、一つだけ、当っている。つまり、それがクーデタと関係しているかもしれないと仮定している点だ」

「しかし証拠はないんだろう」

「だが、彼らは、クーデタの線が一番きなくさいと言って、かなり厳しく捜査しているんだ」

「大使館員は殺るべきではなかったな」

「いや、彼は、ドウムビアの動きを追っていたんだ。君と関係を持ちたがったのは、そのためだった。日本との貿易問題は、彼には、二の次だったんだ」

「ぼくが動くためには、殺害も、やむを得なかったわけか」

「あの殺害事件で、かりに、フランス情報機関を刺戟したとしても、〈R計画〉は守れたんだ。これを掴むまでにはまだ時間がかかる。その前にやればいいのだ」

「その前にやると言っても、情報機関は、あらかじめ、警戒態勢をとらせているのじゃないだろうか？」

「だから、その裏をかくのさ」

「なるほど。それで、象牙海岸を避けるのか」郡司は言った。

午後の強い太陽が照りつけていたが、空気は、軽く、肌に心地よかった。サンタ・クルスに観光客が多いのも、豊かな光のわりには、暑熱が上らないためであった。

舷側に、小舟が近づいてきては、果物や土産物呼び売りしてゆく。デンバ・カマラは、小舟が去ってゆくのを、しばらく黙って眺めていた。

「ドウムビアは、象牙海岸から上陸するプランを諦め、そのかわり、ビサオにしたんだ」

デンバは、黒い顔を郡司のほうに向けた。

「ビサオって、ギニアビサオか？」

「ああ、そうだ。昔のポルトガル領ギニアだ」

郡司は、ポケットから、アフリカの地図を出した。

デンバは西海岸の、セネガルのすぐ南隣の、三角状の小国を、指で示した。

「ここなら、ポルトガル領だったから、フランスの影響力はほとんどないんだ」デンバは、声を低くして言った。「ただビサオには、トラックが足りない。問題は武器を運ぶだけの輸送力を確保できるか、どうか、なのだ」

象牙海岸なら、そのまま北上すれば、セレール共和国の国境に達する。輸送力の点でも、象牙海岸は、かなり調達の余力がある。内政も安定しているから、たとえ武器輸送と分つていても、ことさら、事を荒立てるとは考えられない。

しかも、こんどは、テレビ放送機材の輸入という触れ込みで、木箱を荷揚げする。金品を受けとっている役人たちが、自国に関係のない輸入機材の点検をするわけではない。